令和6年度東大阪市地域研究助成事業

高齢者の地域包括ケアにまつわる文化的手法としての「音楽」のあり方にまつわる実践的研究の報告書

アサダワタル（近畿大学文芸学部文化デザイン学科専任講師）

（1）研究概要

【研究概要】

音楽における「想起」の力に着目し、東大阪市内在住の高齢者が、懐かしい音楽を共に鑑賞・演奏する機会を複数回プロデュースする。研究責任者は博士論文にて「音楽による想起がもたらすコミュニケーションデザイン」にまつわる研究実績を踏まえ、2022年に近畿大学の教員に着任した際より、この大学が位置する東大阪市内での活動へと展開できないかと検討してきた。このような過程を踏まえ、地域の福祉サービスとして音楽を活用した新たなプログラムを発明することで、音楽における地域課題、福祉的課題に対する新たなアプローチの可能性を解き明かすこととする。

【研究活動の目的】

懐かしい音楽を介して、忘れていた記憶を突如として思い出すことがある。その記憶をもとにその場にいる誰かと語り合い、時に歌い、エピソードを交換しあう。誰もが意識することなく行なっているこのようなコミュニケーションにおいて、人は他者との間にどのような関係性を新たに紡ぎ出し、また自己を肯定するきっかけを得ているのだろうか。
本研究では、このような問題意識の下、高齢者の地域における孤立化の課題、認知症をはじめとした介護的課題に対して、音楽を聴くことや奏でることにおける「想起」という機能が、どのような役割を果たすことができるかを、東大阪市内の地域包括ケアセンター等での数回のワークショップのプロデュースを通じて実践的に解き明かす。

【東大阪市との関連】

2023年度に、東大阪市福祉部高齢介護室地域包括ケア推進課が主催し、「ウェルビーイング阪急阪神」などが企画運営する事業「トルクひがしおおさか」の一環で、65歳以上の市民が音楽を通じて新しい仲間と出会うワークショップを、申請者が指導教員を務める文化デザイン学科プロデュースゼミで企画運営した。事前にシニア世代が好む歌謡曲をリサーチし、ラジオ番組を模した演出で、「夏祭り」「誰かとともに歌いたい」「一人でいてもさびしくない」などのテーマで選曲。会場の「MACHICOCO CAFE」では、参加者一人ひとりのエピソードに耳を傾けつつ、時に合唱し、時に歌詞の穴埋めクイズを実施。最終回は、参加者がチームを組んで、本格的なラジオ番組制作を楽しんだ。本企画では、学生ならでは感性でシニア世代の交流を生み出すという意味でも、単に「懐かしい」という機能を超えた、世代間コミュニケーションがもたらす高齢者のつながりづくりという要素も盛り込まれていた。

よう」

材料は府外産、府内で調達する生の創育頭数は月分に満たない。市は、熟成肉として影響を受けるだけだとし、に乏しい自治体で活用してきルは「理解にい撃ちだ」と反

（田中章博）

場産品基準に適上、認められない脱明する。ついては、その体で「返礼品な加工などのう部分を行うことと加価値が生じてとし、原材料のしていなかっでもハムやハンレ付き肉などの地は、これまでていない。ず熟成肉はだめ者は「海外や他一時保管したと称して、付加か疑わしいものなどと説明する。

世代超え「この曲いいね♪」

東大阪 高齢者と近大生交流

65歳以上の高齢者が、思い出の曲を持ち寄り、大学生と交流する。そんな取り組みがこのほど、東大阪市の「MACHICOCO CAFE」で開かれた。

市内に住む65～90歳の16人が、「誰かと歌いたい」「一人でいてもさびしくない」などのテーマで選曲。近畿大学文芸学部文化デザイン学科にあるプロデュースゼミの学生が、ラジオ番組を模して、曲にまつわるエピソードを尋ねた。

会場では「いい日旅立ち」や「幸せなら手をたたこう」などの曲が流れ、「これ、いいね」「聞いたことがある」といった声があがった。学生からは「初めて聞きました」という曲も。参加した中谷玲子さん(68)は「自分が思いつかなかった曲があったり、学生と話したりできて、良い刺激になりました」と話した。

取り組みは、東大阪市が主催し、「ウェルビーイング阪急阪神」などが企画運営する事業「トルクひがしおおさか」の一環で行われた。65歳以上の市民が新たな趣味や仲間と出会うことを目的に、半年単位で連続講座を開いている。11月からは新たに、ボードゲーム教室や園芸体験、男性限定のコーヒー教室などが予定されている。（丹治翔）

思い出の曲を語る参加者と学生たち＝東大阪市御厨2丁目

（2023年10月8日朝日新聞朝刊大阪版 ）

多世代交流

懐かしの音楽を語り合う 音楽鑑賞ワークショップ

10月26日、「MACHICOCO CAFE」（御厨2-5-4）に20人ほどが集まり、「音楽鑑賞ワークショップ」が始まりました。

この講座は、近畿大学の学生とともに、歌謡曲やポップスなどの懐かしの曲を聴きながらその曲の思い出を語りあうなど、通常の音楽鑑賞会とは異なる形式で行っています。

この日は、4つのグループに分かれ、「アニソン」や「旅の曲」など、グループでテーマを決めたあと、そのテーマに沿って選曲し、その曲にまつわる思い出を語る架空のラジオ番組を作成していきました。1つの番組を作るという不安からか、最初は緊張した様子が見られましたが、いざ話し合いが始まると和やかな空気と笑い声に包まれました。

参加者の三村泰信さんは「学生との交流を通して世代間の違いや共通点が分かりました。意外にも心に残るメロディーはいっしょだったりもするんです。今日は番組を作りながら、グループメンバーの人柄や考え方、音楽の楽しみ方を知ることができて良かったです。皆さん情熱をもって音楽について語るので、熱意が私の中にも出てきました。音楽のもつカというものを感じています」と笑顔で話していました。

近畿大学3回生の佐藤和穂さんは「講座が始まる前は少し不安もありました。でも、音楽をきっかけに会話ができ、友達のような関係を築けました」と語っていました。

いよいよ次回はラジオ番組の発表です。番組からは、さまざまな想いが聞こえてくることでしょう。

ON AIR

1 ラジオ番組作成の様子。発表のリハーサルをしています。
2 左はラジオ番組のアイデアを話し合う三村さん。
3 中央は佐藤さん。「参加されている方が私のバイト先に来てくださいました」と笑顔で話します。

講座は、音楽を通じた一人ひとりの語りを大事にし、本人の記憶などを交換できる場となるように取り組んでいます。参加者同士はもちろん、学生との交流も楽しんでほしいですし、いろいろなつながりを作ってほしいです。

近畿大学文芸学部 文化デザイン学科特任講師 アナダ ワタルさん

（東大阪市・市政だより／2024年1月No.1259）

（2）これまでの研究活動の文脈
ー高齢者が集う場での音楽×想起の実践的研究ー

【ケーススタディ①】
カラオケスナックでの同窓会現場でのフィールドワークより（スナック銀杏／北九州市）

【本研究の概要】
本論では、音楽による想起がもたらすコミュニケーションが人間関係を更新し、音楽の聴取 のあり方までをも更新させてゆく一連の動態をいかにしてデザインするか、この主題を解き明かすことを目的とする。そのために本論で為すべきことは、ある特定のコミュニティ間で共有される楽曲が、そのコミュニティの成員ひとり一人の記憶を想起させつつも、そこに新たな音楽実践が差し挟まれることによって、成員間により多様な対話と想起を促し、その楽曲の存在を捉え直してゆくプロセスを精緻に記述することである。
その目的に沿ったフィールドとして、 本論では、福岡県北九州市小倉北区にある歌声スナック「銀杏」における同窓会現場を考察対象とした。「銀杏」では、同窓会という集団凝集性が比較的高いコミュニティの中に、経営者（ママ）である入江公子による「校歌のオリジナルカラオケ映像の制作」というユニークな実践が差し挟まれることによって、これまでの同窓会における校歌斉唱では生まれ得なかった特異な コミュニケーションがデザインされている。

（スナック銀杏で校歌のカラオケ映像で盛り上がる）

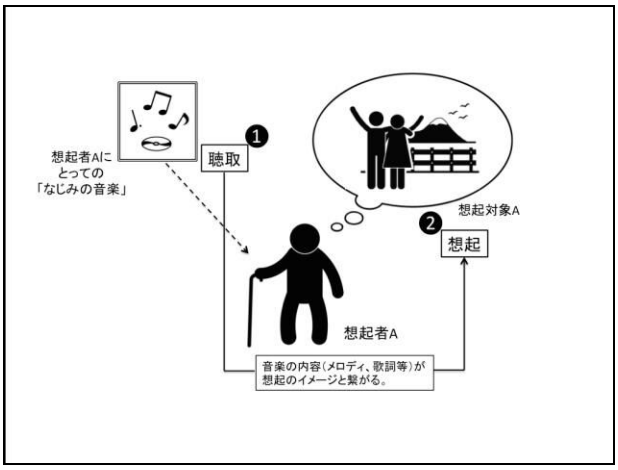
（校歌のカラオケ映像のタイトルシーン）

（校歌の歌詞に関連するシーンを撮影）

（同窓生が校歌を歌う様子をママが撮影する様子）

（1）これまでの研究活動の文脈
ー高齢者が集う場での音楽×想起の実践的研究ー

【研究のポイント】
“ひとり”で思い出すのではなく、“誰かと共に”思い出すということによる、想起の幅やエンパワメントについて考えること。

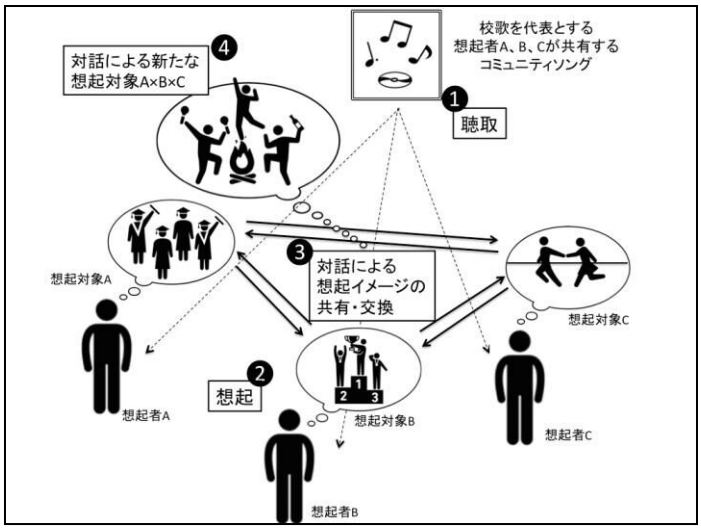


（音楽を聴き一人で思い出す想起のモデル）

一人で思い出すことから世代や属性が近しい他者と共に思い出し

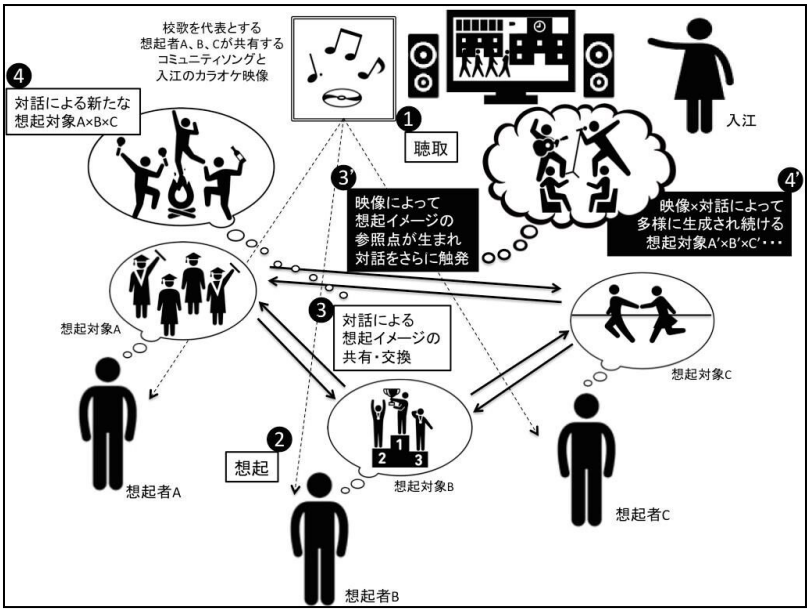
さらにはその想起のプロセスに世代とも属性も違う

さらなる他者が触媒となって想起が豊かになるプロセス



（音楽を聴き近しい他者と語り合う想起のモデル）

判明したことは、同窓生たち想起者が校歌を通じてただ過去を懐かしむだけではなく、むしろ現在の時点からの対話と想起を通じて過去の様々な側面を再発見し、他の同窓生たちとの間で紡いできた関係性をさらにアップデートしてゆくといったコミュニケーションが生成されていた点である。そして、この特徴的な想起の仕方において、校歌は、過去と繋がりながらも現在を読み替えていくための触媒として大きな機能を果し、さらに聞き手である入江が同窓生の想起の「メディエーター（媒介者）」となることで、より複雑でダイナミックな想起のコミュニケーションをもたらしていたことも確認できた。



（音楽を聴き近しい他者ではない
属性の異なる他者が触媒となる想起のモデル）

（2）これまでの研究活動の文脈
ー高齢者が集う場での音楽×想起の実践的研究ー

【ケーススタディ②】
復興公営住宅におけるコミュニティラジオづくりを通じたアクションリサーチより（福島県営下神白団地／いわき市）

【本研究の概要】
本論では、音楽による想起がもたらすコミュニケーションが人間関係を更新し、音楽の聴取 のあり方までをも更新させてゆく一連の動態をいかにしてデザインするか、この主題を解き明かすことを目的とする。そのための具体的な問題設定として、ケアや支援現場においてなされる「音楽×想起」の関係には、支援対象となる高齢者が音楽によって想起しエンパワメントされるという状況のなかで、これまで「支援する側」とされてきた対人援助職やケアに関わるボランティアなど第三者の存在が、クライエントの想起のプロセスに関わる中で自己変容するというプロセスに着目した。
その目的に沿ったフィールドとして、本論では、福島県いわき市にある県営復興住宅「下神白（しもかじろ）団地」に長期にわたり通い、ここに住む双葉郡出身の住民たちの「かつて住んでいた町」（その多くは福島第一原発事故により帰宅困難区域に指定されている）の思い出を「当時の馴染み深い音楽」を聴きながら語り合う「コミュニティラジオ」という演出で、実践的な研究を行なった。

（下神白団地外観）

（団地住民とラジオを収録中）

（ラジオ出演住民の似顔絵や曲目を掲載したジャケット）

（ラジオCDのセット。リクエストカード等が同封）

（２）これまでの研究活動の文脈
ー高齢者が集う場での音楽×想起の実践的研究ー

【研究のポイント１】

・「音楽による記憶のシェア」がもたらすのは、ただ単に「懐かしい！」という感情だけでなく、相手の属性（立場や肩書き）を超えたつながりづくりを生み出すこと

浪江町ご出身の住民　渡部茂子さんの発言：

やっぱり耳から入るもので心がちょっと癒されて“嬉しい”って笑顔で声も発生する。（今回の震災や原発事故で）“歌う”っていうその能力も失ったわけだね。そのなかで、“歌ってみょうかな”って、台所にいて口に出たり。やっぱり音楽かなって。みんな思い出の曲ばっかりだしね、７０も生きてたら。（中略） 誰のせいだってことを言うこと自体が私胸が痛くなるの。だからそうじゃなくて、もういいとこだけ仕舞い込んで、そして今度は自分で心を健康にしていかないといけないって考えたんだな。どの人もみんな大好きになれば。やっぱりひとり一人が自分で、自分の考えでしっかりと進んでいく、その手立てをしていった方がいいかなって考えたんだ。（中略）数字で並べられたってそういうもんじゃない気持ちって、言葉に出せない、それってのはそれぞれ自分自身で癒していったりとか、保っていかなきゃいけないんだけれど、それには十分時間がかかるってことだけ思ったときに、あっ、もうあんまり急がない。肩の力を抜いていった方がいいよね。そうすると皆とも同じレベルで話ができる。

（「ラジオ下神白　―あのときあのまちの音楽からいまここへ Vol.1 特集：常磐ハワイアンセンターの思い出」の14曲目「振り返り～これからのこと」浪江町ご出身の渡部茂子さんの発言より）

【研究のポイント２】

・さらには世代を超えた（本来のは懐かしくないはずの）若者にまで影響を与えること。

20代のプロジェクトスタッフの発言：

最近、移動中によくラジオ下神白を聞いていて、 思ったこと、つらつらと書かせてくださいすみません。 １弾、２弾、リクエストすべてにおいて私の馴染みのある曲はなかったのですが(笑) みなさんのエピソードと思い出の曲を聴いているといろいろな感情が溢れてきて。 私いま、毎日が全然楽しくなくて、何のために生きてるんだろうってすごく懐疑的な日々を送ってたんです。 でも、何回もラジオ聞いてて改めて感じたことがあって。 例えばロート製薬のCMなんか、私は「ロート♪ロート、ロート♪ロート製～薬～♪」 の時代で、SMAP×SMAPの前に流れていたなぁ、 とか、この頃受験勉強やってたなぁってことを思い出しました。 頑張ってたなぁとか。

いま、自分自身の未来については全然希望も持てなくてすごく不安定なんですが、 過去の思い出は絶対で、 「確かにあの時を過ごした」っていう確信のようなものが、いまの自分を支える自信につながっているような気がするんです。（中略） 皆さんのライフヒストリーを聞きながら、人の人生にタイムスリップするのもすごく楽しいです。（中略）下神白だけでなく、若者にもちゃんと届いてます！

（2017年11月末のFacebookメールでの報告者とのやりとりより引用。）

以後、今回の東大阪市での実践的研究の報告（３）においては、
これら３つの視点を持ってご報告をする。

- **誰かと共に思い出すという場の創出**
- **音楽だからこその、感性に訴えるつながりの場の創出**
- **高齢者（懐かしむ／支援される）／若者（懐かしさを届ける／支援する）という関係を超えた関係の創出**

（３）「かわちのくにの思い出ラジオ」実践報告と考察

【実践報告】

■アクションリサーチ（実践型の研究）
□地域活動支援センター福寿苑、千寿園との取り組み　かわちのくにの思い出ラジオ in 東大阪の縄手北・枚岡エリア
日時：2024年10月3日(木)13時―15時　会場：珈琲とコインランドリーのお店 ハレ・２Fスタジオ　参加人数：20名程度
□地域活動支援センターアンパス東大阪との取り組み　かわちのくにの思い出ラジオ in 東大阪の若江・玉川エリア
日時：2024年11月14日(木)14時―16時　会場：東大阪市リージョンセンターくすのきプラザ・ミニ音楽ホール　参加人数：20名程度
□地域活動支援センターサンホームとの取り組み　かわちのくにの思い出ラジオ in 東大阪の意岐部エリア
日時：2024年11月28日(木)13時―15時　会場：文化創造館創造支援室M1　参加人数：20名程度

▪ケア×文化活動のフィールドワーク
□サポートセンター連（横浜市旭区の知的障害者施設）におけるラジオワークショップ
日時：2024年9月6日(金)　会場：サポートセンター連2階食堂
□地域作業所カプカプ（横浜市旭区の知的障害者施設）の福祉祭りでのダンス、ペイント、ラジオワークショップ
日時：2024年9月28日(土)　会場：喫茶カプカプ、工房カプカプカプ
□社会福祉法人愛成会アートディレクターへの現場実践ヒアリング
日時：2024年10月24日(木)　会場：都内中央区喫茶店
□サポートセンター連（横浜市旭区の知的障害者施設）におけるラジオワークショップ、映画「プリズンサークル」の上映座談会
日時：2025年1月10日(金)　会場：サポートセンター連2階食堂、日時：2025年1月11日(土) 成城大学007教室

▪活動報告会ならびに関連映画上映
□ かわちのくにの思い出ラジオ in 東大阪　&「ラジオ下神白」上映会
日時：2024年12月12日(木)　会場：文化創造館創多目的ホール　参加人数：60名程度

（3）「かわちのくにの思い出ラジオ」実践報告と考察

【当初の企画案と大まかな企画の流れ】

2024年5月29日（アサダ）

東大阪市地域包括音楽プロジェクト（東エリア版）企画案

音楽によるシニア交流プログラム with 東大阪市

「かわちのくにの思い出ラジオ」(仮称)

【概要】

東大阪市内の地域包括支援センターが実施する交流の場（プログラム）に参加している人に加えて、65歳から70代前半など比較的若い、新たな世代にも参加してもらい、地域交流の裾野を広げるための音楽プログラムを実施します。これまで、市内で開催されていた新しい介護予防プロジェクト「トルクひがしおおさか」での、音楽プログラムのプロデュースですでに実績のある近畿大学のアサダワタルとそのゼミ生等が企画提案を行い、市内の東エリア、中エリア、西エリアの3箇所で2024年10月―11月に、地域のコミュニティカフェや、レンタルスペース、公共施設などで実施予定です。市内在住の65歳以上の方々であればどなたでも参加できるよう広報を行いますが、あまり「特別なイベント」として開催すると、今後、地域包括の職員さんなど関係者が継続して運営する際の負担（スキル上、運営労力上）になることも踏まえ、「開きつつも、これまでの集いの場の延長として」というモードで実施できればと良いと考えます。それには、これまでの集いの場（例：カトレア会等）の参加者にも呼びかけつつ、かつ、トルクひがしおおさか参加者にも居住エリアを考慮してピンポイントで呼びかける必要があります。あまり闇雲に広げずに、確実につながっていける人をまずは呼び込むことに注力できればと思います。実施後には、振り返り（アサダによるインタビューも兼ねる）の機会も別途設け、次年度以降に何かしらの継続的な交流やプログラム実施が生まれることを目指せれば幸いです。

【日時・会場・定員など】

日時：10月～11月の木曜13時～15時に3エリアで開催。　※12月に「シニア×音楽」にまつわる上映会，1月～2月に3回実施したプログラムの記録映像などを見ながら全エリア職員さんと語り合う報告会（研修会）ができればと思ってます。

■東エリア

日時(案)：10月3日(木)13時―15時　※準備のため11時には会場入り・16時には完全撤収。

会場(案)：珈琲とコインランドリーのお店 ハレ・2Fスタジオ（※火曜の実施がアサダ・ゼミ生の都合で難しいことが判明／2Fスタジオが参加者の足腰や音量の関係で難しければ残念ながら別会場も検討）　参考：https://hare-coffeelaundry.mystrikingly.com/

■中エリア

日時(案)：10月24日(木)13時―15時　※準備のため11時には会場入り・16時には完全撤収。

会場(案)：東大阪市リージョンセンターくすのきプラザ・ミニ音楽ホール（遮音性とキャパのバランス）

参考：https://shimin-plaza.com/wakaeiwata/guidance/room-details/5f-07/

■西エリア：

日時(案)：11月28日(木)13時―15時　※準備のため11時には会場入り・16時には完全撤収。

会場：文化創造館創造支援室M1（遮音性とキャパのバランス）

参考：https://higashiosaka.hall-info.jp/vc-files/images/pdf/facility_guidance.pdf

【具体的なプラン】

トルクひがしおおさか、ならびに地域包括支援センターの職員向け研修会で実施した「参加者の思いの出の楽曲をテーマにしたラジオスタイルのプログラム」をベースにしながら、学生が考案する演出や、一部、生演奏なども含めて展開。参加者同士の交流はもちろんのこと、シニア世代以上の参加者と20代の学生といった世代を超えた交流も企図する。

（研究開始当初2024年5月時点の企画案）

“私”にとって馴染み深い「マイテーマソング」を持ちよる。

↓

当時の思い出・エピソードをお話ししていただく

↓

それを「ラジオ風」に演出する

↓

人生の軌跡（の一部）をささやかながら分かち合う

↓

その触媒（メディエーター）として、まったく異なる世代の学生（近大プロデュースゼミ生）が関わる

（3）「かわちのくにの思い出ラジオ」実践報告と考察　ー東エリア編ー

参加者数：20名

演出のポイント：

▪初回ということもあり、教員（アサダ）がこれまで各地の福祉施設等で実施してきた「ラジオワークショップ」のスタイルを踏襲し、司会を進行（学生はこの段階では見様見真似の状態）。

▪モデルゲストとしてトルクひがしおおさかでご一緒した地域住民が「見本」を見せる。

▪生演奏の時間を２曲設ける。（これまでになかった新たな取り組み）

▪事前に包括担当職員さんよりいただいた参加者アンケートをもとに、地域、性別、楽曲のエピソードなどをもとに「ラジオブース出演者」をあらかじめ絞る。

▪ 「ラジオブース出演者」を正面に配置し、かつ時間も長めにとったため、参加者間の交流よりも、「ラジオを聴く（見る）」という時間の方が強めの設定。

成果と課題

休憩中もわいわい話されていて、**終了後も仲良くなられてた**のが印象的だった。千寿園、福寿苑が一緒にこういった企画をすること自体も初めてだったので、参加者も両方の利用者がまじっていた班でもコミュニケーションできていたのがよかった。（包括職員Aさん）

事前に参加者さんに**インタビュー（アンケート）をとっている過程がすごく楽しく**て、いきいきと話をしてくれてほんとによかったと思いますし、語り尽くせない感じがあったと思う。同じ席同士で初めて会ったけど、**電話番号をお互い交換していかれた方もいた**。（包括職員Cさん）

終わった後もテーブルでいっぱい話を聞かせてもらった。すごく嬉しかった。自分自身も参加者の世代の方と話すの自分の祖父母くらいしかないので、しゃべれて楽しかった。（学生C／演奏・テーブル担当）

一階のカフェで帰りのバスを待っている間に、**今日初めて会った参加者同士がお茶をしている**ことを知って感動した。（学生A ／司会担当 ）

最後に出演された女性の方が**「どうしても女性同士の友達で集まっても病気の話ばっかりになるけど、今日はこんなに心から楽しめるなんて」**と言ってくれた。（東大阪市担当職員Aさん）

→知らない人同士がつながるきっかけとしての音楽の役割
→イベント本番だけでない、そのプロセスやアフターでのコミュニケーションの大切さ

高齢者の話よりも大学生との交流がとにかく楽しかった。大学生と話すってこと自体が高齢者はほとんどない。共通のバンドを知っていたりとか、そういう交流が嬉しい。（トルク参加者Bさん）

「世代間を超えて話ができたことがとても嬉しかった」とおっしゃった参加者さんがいて、前に出られた方の表情がすごく明るく笑顔だったのが印象的だった。（包括職員Bさん）

今日来られた方は音楽が好きな方が多かったとは思うが、学生さんがそれぞれのテーブルに入ってくれたことで、いつもよりもっと若々しくいろんなことをお話ししてくださってたと思う。刺激が多かったと思う。こういう活動を包括のなかでも取り入れていけたらと思う。（包括職員Dさん）

終わった後もテーブルでいっぱい話を聞かせてもらった。すごく嬉しかった。自分自身も参加者の世代の方と話すの自分の祖父母くらいしかないので、しゃべれて楽しかった。（学生C／演奏・テーブル担当）

曲もお話も知らないことばかりを聴くことができたのがすごく面白かった。（学生B／司会担当）

ラジオって普通は耳で聴くけど、実際に人の顔を見ながらやるのは斬新で、また近大ご出身の参加者さんと結構お話ができて「先輩！」って感じで勉強になった。（学生D／演奏・テーブル担当）

→音楽という要素に、さらに大学生が関わることによって、双方向にとっての刺激的な体験ができている。同世代で「懐かしい」という状況だけに止まらない出会い

曲がかからなかった方にも一言でもマイクを回して話してもらえたらと思った。（トルク参加者Aさん）

「ラジオ形式」がとても新鮮で特別感があったと思う。結構、事前アンケートでも長文で返してくださる方がおられたのでやはり自分の思いを伝えたい人がいるので、ブース出演者ほど長くなくてもいいから、一言でもしゃべれたらここにきてよかったなと思う、バージョンアップした場になればと思う。（基幹型包括職員Aさん）

当日、「申し込んでないけど参加できるか？」と尋ねてこられた方がおり、定員が決まっている（会場の広さがある／地元の会場を使う意味はありつつ）ので、そのあたりの対応をどうにかできてもよかったかもしれない。（包括職員Eさん）

最後に出演された女性の方が「どうしても女性同士の友達で集まっても病気の話ばっかりになるけど、今日はこんなに心から楽しめるなんて」と言ってくれた。今後はこの地域に住んでいる若年性認知症でジャズが好きな方にも参加してもらいたい。病気のせいであきらめちゃっていることをどうにかして実現させたい。（東大阪市担当職員Aさん）

→「参加のあり方」をどうデザインするかを常に考える必要性がある。できるだけすべて人が「ケアされている」という状況づくりを進めるために発言できるタイムスケジュールや企画の進め方を再検討。また、事前アンケートへの参加は必須としていたが、飛び込みなどの対応も要検討か。

（3）「かわちのくにの思い出ラジオ」実践報告と考察　ー中エリア編ー

参加者数：17名

演出のポイント：

▪学生主導での企画構成を行い、関わる学生数を増やす。

▪ゆったりと広い会場で行うことの、対話の棲み分け（互いの会話を聞こえやすくするための席の配置など）

▪各グループで学生ファシリテーションのもと「イントロドン」や「ミニラジオ」（グループワーク）を実施してもらったのちに、メインブースでのラジオを行うように。

▪引き続き生演奏の時間を２曲設けるが、大きな歌詞カードを設けることで（前回配布対応だった）全員が顔を挙げて歌えるように。

成果と課題

やっぱり**グループワークがバージョンアップ**して、みなさん楽しんで帰ってくれた。学生さんの司会も素晴らしく、歌詞カードの工夫もよかった。イントロドンも。（基幹型包括職員Aさん）。

最初来た時は場違いだったんじゃないかとお腹が痛くなってきたと言っていた参加者さんも終わった後は「すごく楽しかった」と言ってくださった。**選ばれなかった方もグループワークの規模でおしゃべりできたことがよかった**と言っていた。（包括職員Aさん）

最初からグループに入った時から知り合いのように輪が広がっていって、**そこに学生さんが入ることでさらに輪が広がって**いった。最初は戸惑っていた参加者さんもいざ**前のラジオに出るとすごいしっかり話されいたし、男性の方も結構参加**してくださったのはよかった。（包括職員Bさん）

グループワークがすごく楽しくて、参加者さんがこんな歌を聞きたいと言ったら、**学生さんがさっとスマホで曲をかけてくれて、これ自体が「まさに異世代交流！」**といった感じだった。（包括職員Cさん）

世代を超えてお話しすることが直接ないので、すごく温かい気持ちになりました。おばあちゃんやおじいちゃんに会いたくなる時間となった。（学生Aさん／グループワーク担当）

前回よりも関わり合う時間が多かったのでより楽しめた。みなさんのおかげで司会も回せた。（学生B
さん／司会担当）

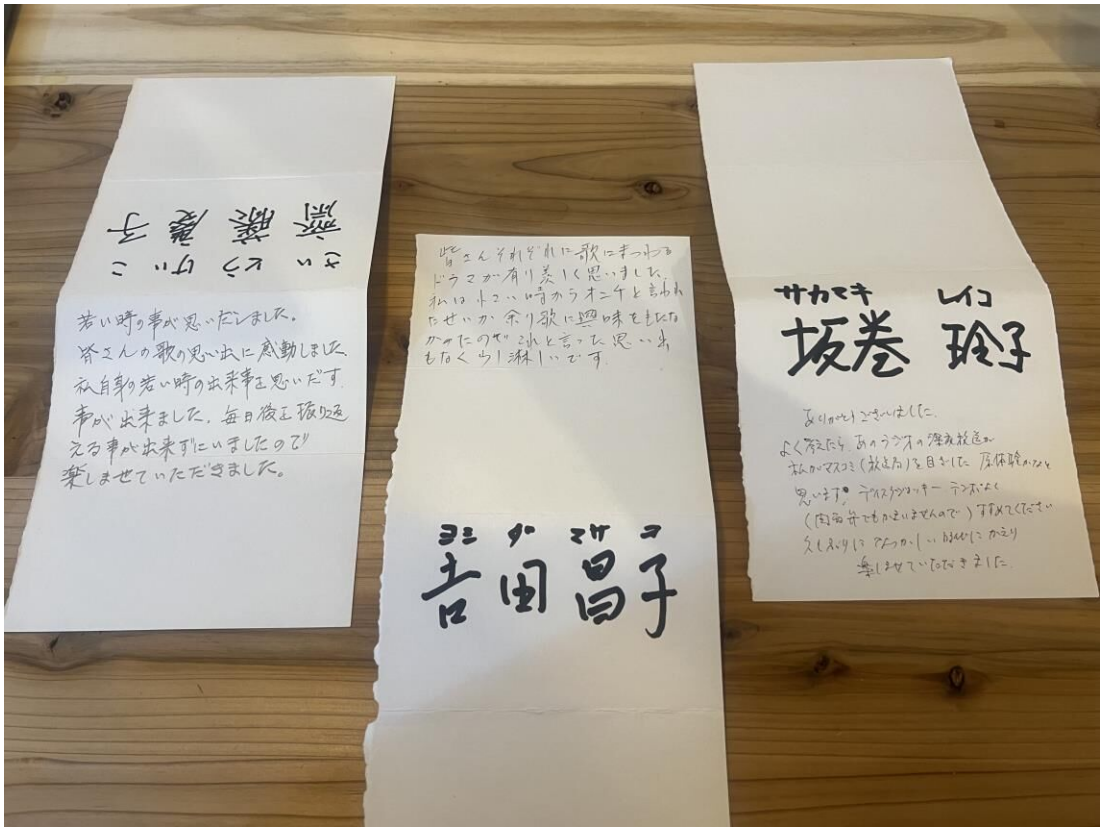
音楽をしている身として、音楽と思い出がつながっているのがとても素敵だった。学生主体としてやって反省するところもあるので次にさらに活かしたい。（学生Cさん／司会担当）

池島地区から来てくださった方もちゃんとお話ししてくださるかドキドキはしていたが、すごく楽しそうに話してくださった。（包括職員Dさん）

今日４人欠席があって、たまたま私が関わってきた利用者さんだったので、ご病気やお怪我やらで残念だったが、みなさんがラジオや生演奏してくれたことはしっかり伝えようと思います。（包括職員Eさん）

次回はできるだけ若めの方をお呼びしようと思ってるが苦戦はしている。プライベートな話することや名前を言うことが嫌といった意見もある。でも、今日の参加者さんのみなさんがとても上手にエピソードを伝えられていたので、もう少しこちらも熱量を増やして誘っていきたい。（次回担当の包括職員Aさん）

→異世代交流の要素の強化
→全体に向けて話す（メインラジオ）、小グループで話す（ミニラジオ）という異なる質の対話の
**　時間を設けることによるコミュニケーションの深まり**
→グループでの交流時間をできるだけ多く取ることで、参加者も学生も満足度が高いか



（参加者のアンケートより抜粋）

（3）「かわちのくにの思い出ラジオ」実践報告と考察　ー西エリア編ー

参加者数：21名

演出のポイント：

▪担当包括職員さんによる、これまで包括を利用されていない比較的若い層への声かけも積極的に行う（新たな出会いが生まれるために）

▪ラジオブースを「前」ではなく、「真ん中」に持ってくることで、取り囲むようにラジオを聴く状態を演出（ミニラジオとメインのラジオの境界を薄くすることでつねに対話のテンションを保つ）

▪休憩中に、学生による生ピアノ演奏（アンケートでリクエストをもらっていた曲を中心に）行い、常に音楽による語りを創出する演出をほどこす。

成果と課題

１回目、２回目、３回目とどんどん良くなってきている。学生さんも細かいテクニックみたいなことでなくて、高齢者の方と向き合ってこの場を作ってくれたことが嬉しい。**ある男性の参加者が別の参加者に「ご近所やったけど知らなかった」って言っていて、「〇〇さんのご主人だったんですね！」といった会話がされていた。**（東大阪市担当職員Aさん）

今日は配置も変えて工夫もしながら**マンネリ化せず**に楽しめた（学生Aさん／司会担当）

いつもご近所さんやアルバイトの接客で高齢の方と話すことはあっても、**こういった「音楽」という共通のテーマで語り合うことはすごく楽しい**ことだと気づいた。（学生Bさん／演奏担当）

中央でラジオをやっているときも**あっちこっちから声が聞こえていて会話がたくさん生まれていた。一体感を感じた。**（学生Cさん／グループワーク担当）

引き出し方、相手の話をしっかり聴くこと、そして事前にしっかり参加者さんの曲を予習してくれているなど、学生さんのトークがすごく上手くなっていた。（基幹型包括職員Aさん）

はじめて参加させてもらったが、参加者さんが**「またマンションでお会いした際にはよろしくね」と声をかけているのをまのあたりにして、この場自体が地域のつながりの場になっている**ことを実感した。（包括職員Aさん）

３回目でうちは得したなと（笑）Aさんが言ってくれたようにわざと住所で分けてグループにした。ほんとは混ぜようかなっておもったけど、**今後の地域生活のことを考えたら顔は見たことあるなって人たちがつながってもらえたらと思った**、そういう意味でもいい交流の場になったので助かった。**近いエリアの人たちをお互い再発見する場**になったのでは。（包括職員Bさん）

普段、地域活動を頻繁にやってらっしゃる参加者さんが**いつもとは違う表情で、リラックスされていた。いい意味で受け身で楽しめたのではないか**。前回の中エリアの見学の際にはまだ予約者が全然いなかったが、地域のコーラスグループの方に声をかけたが断られて、できるだけ前期高齢者で転居してきたばかりの人の数珠繋ぎで集まった。**見ず知らずの人もいた。地域をまだ知らない人たち、男性も含めてが集まってとてもいい機会になった**。（包括職員Cさん）

学生さんの事前準備や、包括さんの裏準備などがやはりあったことでできたこと。（社会福祉協議会Aさん）

→地域ご近所別というグループ分けという包括職員の下準備　× 普段とは違う「音楽（ラジオ）」
**　という切り口での交流　という組み合わせから得られたリラックスした場づくり**
→学生自身のファシリテーション力（引き出し方、話を聴く力）の向上もあり、３回目という場で
**　より交流が深化**
→やり方を変える。マンネリ化させない（マニュアルや定型にこだわりすぎない）フレキシブルな
**　企画運営を心がける**

（4）まとめ・今後の課題

これまでのフィールドワーク（北九州市など）、アクションリサーチ（いわき市など）で得た研究知見は、
“ひとり”で思い出すのではなく、“誰かと共に”思い出すということによる、想起の幅やエンパワメントについて考えること。
「音楽による記憶のシェア」がもたらすのは、ただ単に「懐かしい！」という感情だけでなく、相手の属性（立場や肩書き）を超えたつながりづくりを生み出すこと。
さらには世代を超えた（本来のは懐かしくないはずの）若者にまで影響を与えること。
これらの視点を踏まえて、最後に以下の６つの視点を纏める。

①「つながってほしい人」をできるだけ具体的に想定しながら、包括職員が丁寧に声掛けし、アンケートを通じて参加者の声と向き合うというプロセスが極めてケアフル。まずこれがあっての「本番」があること。

②文化的な地域・ケア実践を専門とする教員や学生は、その包括職員のケアを「別のやりかた」で引き継ぎながら、音楽と語りの場を演出。これが参加者にとって「絶妙な非日常」の機会となったのではないか。音楽だけではなく、学生がいるという異世代交流の要素もあればなおのこといい。

③過去の記憶と向き合う経験をひとりではなく共にすることで互いの人生経験を愛で合う。一方で、自分の記憶の価値を他人と比較する場ではなく、これまでの人生を肯定できるような場づくりをめざすべき。そこに学生がいることは、同世代での記憶の比較にとどまらず、良い意味で相対化する機会にもなりはしないか。

④学生がしてあげるという関係ではない。学生自身が高齢者の語りによって「聴く力」が養われる。つまり、参加者である高齢者が学生をむしろエンパワメントしている場でもある。

⑤全体に対して語る時間とともに、参加者みなが必ず語り合える機会・時間を丁寧に確保することの重要性。それがあって、全体の一体感、愛で合う時間を情勢できる。またその時間を生み出すために、企画の完成を求めずに、さまざまなパターンを試す柔軟性を忘れない。

⑥継続性を望む声があったが、どのようなリソース（人的、金銭的、場所的・・・）があれば、小規模にでも開催できるか。サービスの外でやることでこれまでサービス利用という関係ではつながらなかった人たちとの出会いや、福祉領域外でのつながり（重層的支援？）のあり方をこの場で議論してもいいのでは。